

まんだら通信

第159号(通巻191号)

平成21年(2009)09月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高嶺 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
http://www.shiunji.org/
Mail post@shiunji.org



李登輝さんの話を聞く

李登輝さんは大正12年日本領時代、台湾の台北市生まれの86歳。

京都帝国大学在学中に陸軍に志願入隊し少尉に昇進し、終戦でいったんは京大に戻るものの、その後台湾に帰り台湾大学(もとの台北帝国大学)でしようかを卒業して渡米。

アメリカで二つの大学を卒業の後、台湾に帰国後は大学の先生から政治の世界に進み、約20年前の88年には国民党の総統に推され、台湾の民主化と経済発展に力を尽くした、大の日本びいきとして有名ですね。

東京青年会議所やNPO法人武士道協

会などの要請に添えて、経済大国といながら、このところ何かと元気がない日本人に、戦前のような誇りを取り戻し一日も早く元気になるってほしいと、先日来日しました。

テレビや新聞でご覧になったかと思いますが、9月5日、ちょうど私の75回目の誕生日に、家内と二人で日比谷公会堂での講演を聞きに行ってきました。

開場一時間前には上の写真のように長蛇の列で、手荷物・身体検査のあと入場しましたが、二千人の席はたちまちいっぱいになってしまいました。

若い人も大勢でしたが、日本はこのままではいけないと思っている人が沢山いるということですね。

元総統は八十六歳とは思えぬ、元気で大きな声で、鎖国から開国に導いた熱血漢の一人、坂本龍馬の「船中八策(趣旨は『五箇条の御誓文』に引き継がれていますね)を例に引きながら、今後の日本のあるべき姿を熱心に説いてくださいました。

私も常々思っていることですが、戦争に負けた焼け跡で、復員兵と引き揚げ者でゴった返していたあの頃と、現在の経済大国とを思い比べると、世界のだれに向かっても胸を張って良いことだと思えます。

この経済力で、中国や韓国をはじめ後から来る国々に手助けを続けてきました。

また国連分担金では、常任理事国でもない日本はアメリカの次で世界二位です。卑怯なことに、アメリカは滞納率も

一位だそうですが。

ちなみに今、飛ぶ鳥を落とす勢いの中国は九位で、額は日本の一〇分の一、事務総長を出している韓国などは十二位です。

そのほか国連平和維持活動(PKO)や世界保健機関(WHO)、ユネスコなどに、どの国よりも多くの資金を負担しています。にも関わらず、世界から大国として扱われないのは、「敗戦で怖じ気づき、自己否定から抜け出せない日本人に問題がある」と、李登輝さんはおっしゃいます。

ボイス十月号でも「私が学んだのは、世界に稀な美意識を持つ文化を背景に、品格と価値観を持った指導者が教えていた戦前の日本の教育でした」、そして「今でも、日本人の間には高い精神性と美意識が残されていると思います。例えば新幹線や旅館でのきめ細かなサービス、もてなしの精神は、世界から日本を訪れる人々を感動させるものです。一方でモノづくりの精度の高さ、質へのこだわりも、世界有数のレベルにあります。このような日本人の特質をさらに高めてゆくための教育改革が求められているのではないのでしょうか」とおっしゃいます。

数は少ないものの、歴史を正しく学んだ人は「戦前も含めて、この国は世界で稀に見る正しい国だった」といいます。自分でこの国の歴史をおさらいしてみても、全くその通りだということばかりでした。「日本は正しかった」という誇りが持てる時、日本に背骨が入ります。

余滴

◆本当の夏が来ないうちに9月になってしまいました。昨夜、中学校下の海岸に行ってきました。通り過ぎた台風の余波に負けないほど、秋の虫たち、中でも鈴虫の音が賑やかで、久しぶりにつろいだ気持ちになりました。

◆今月24日、午後1時半からお施餓鬼です。紫雲寺・長福寺・石戸寺・観乗院のお檀家が集まっています。世話人さん、総代さんがお世話をしますが、そうでない方は電話でご連絡ください。今年も丸山東光院の御前さまにお話を願いますので、誘いあってお参りください

いますよう。

せつかくの功德の機会です。お見逃しのないよう。

◆昨日、佛画家の田治見美代子さんが軸装済みの阿彌陀さまの来迎図を送ってくださいました。

紺地に金色の線描で、儀軌にしたがってお描きになったのですが、ふっくらとしたお顔が、何故か現代風に見えました。これでまたお寺の宝が増えました。

田治見さんには今まで、弘法大師像や善財童子像、如意輪観音像のほか沢山の仏画を載せております。

有り難いことです。

◆今月の野草はママコノシリヌグイ【タデ科イヌタデ属】です。田んぼの水路の脇のような、湿気の多いところを好むようです。ピンクの金平糖を思わせる可憐な花ですが、葉の裏や茎に逆向きのトゲがびっしり生えています。

それにしても、継母が憎い継子のお尻をこれで拭いたらさぞ満足だろうとは。

どこの植物学者さんが知りませんが、随分と趣味の悪い名前を付けたものです。誰より、この野草が気の毒です。

09.09.09 龍渉



日本文情小断 第四十五話

事故

えー、毎日のように車の事故のニュースがテレビ画面を通して流れてまいります。そのたびに亡くなられた方はもちろん、その家族の悲しみはいかばかりかと存じます。

高速道路千円乗り放題も結構でございますが、車に乗られる方はどうかお気を付けていただきたいと思いますが……。今日は、ちよつと悲しい事故の話をしたと思います。

新聞に、こんな投書が掲載されていました。

ある青年が運転中に、突然、道路に飛び出してきた猫を思い切り撥ねてしまったんだそうです。

猫というのは、危ないという瞬間に止まったり、戻ったりすることをしないそうです。習性なんだそうですが、撥ねてしまった青年も「アッ」と思った時にはすでに遅かったようです。猫だけに「キヤツ」と叫んだかもしれません。

(あつ、やばい、どうしよう……)

後続の車も来なかつたようですから、かなりすいている田舎の道だったんでしょう。青年が恐る恐る車を降りて見ると、猫はアスファルト上で即死状態。これまで無事故だった青年は、罪の重さに目がくらんだといえます。

さらに青年の罪の意識に追い打ちをかけるように、子猫が四匹も出てきて、動かない親猫を取り囲んで、ニヤーニヤー鳴いている。

(え、マジかよー)

わかりますよね、彼の気持ち。放っておくわけにもいかないので、青年はとつぎに車のトランクのなかにあった段ボールの空き箱に親猫の死体と子猫

たちを入れて、家に持ち帰り、庭先に穴を掘って、親猫を埋め、小さなお墓をつくって冥福を祈つたそうです。

あとは、子猫です。彼は、携帯電話を取り出すと、友人たちに電話をかけ続けました。事情を説明すると、心ある友だち三人が、それぞれ一匹ずつ引き取ってくれることになり、自分も家族の了解を得て、残りの一匹との生活が始まったそうです。

そして、毎年、親猫の命日が来ると、彼は庭先の小さな墓にお線香を供え、手を合わせて目を閉じ、命を奪ってしまったことへの謝罪と、子猫たちがみんな元気な元気で過ごしていることを報告しているそうです。

たぶん、野良猫だったんでしょう。そうだとすると、母親が身を犠牲にして、子供たちの幸せな未来を導いたと言ってもいいでしょう。

お墓に手を合わせ終え、ふと、振り返ると、かつての子猫がいまやデブ猫になって、縁側で昼寝をしていたと最後に結んでありました。

それにしても、いまどき、こんなやさしい青年がいるんですね。

先日、この話を行きつけの寿司屋でしたところ、常連の獣医さんがもうひとつおまけの話をしてくれました。

カサイ先生と仰うのですが、この先生、そこらの獣医さんと違って、大変に苦勞人でございます。アルバイトをしながら学費を払って、大学を卒業したんだそうです。以来十数年、先生、一生懸命働いてお金を貯め、苦勞して、ようやく自分の病院を持った最初の日。

「ここが俺の病院か。よーし、これで、夢がかなった。さあ、がんばるぞ」ところが、そうそう簡単にお客さんが

入ってきません。「まあ、いいか、そのうちに来るだろう」

そう思つて、診察室で大きく背伸びをしたその時、最初のお客さんがやってきました。見ると、小学生です。

「どうしたんだ、僕」
「先生、学校の帰りに歩いていたら、この猫、車に轢かれていたんだ。助けてあげて」

両手で猫を持って、先生に差し出します。

「ちよつと待つてね、いま、診てあげるから」

一目見てその猫が即死状態であることはわかつたけれど、猫を丁寧に手術台に乗せ、手を合わせました。

「坊や、よく連れてきてくれたね、残念だけど、あの猫ちゃん、自動車に撥ねられて、頭を強く打つて、死んでいたよ。でも、僕の最初のお客さんには間違いない。あとは、僕にまかせてくれないか。ありがとう。君も道を渡る時は、気をつけるんだよ」

「うん。でも、あの猫、どうなるの？」

「猫の葬儀社に頼んで、お骨にしてもらつて、それでお墓に埋めるんだ。お墓ができたら、教えてあげるから、学校の帰りに拜んでくれるかな。あの猫も喜ぶからね」
「わかつた、先生、ありがとう」
少年はランドセルをカタカタ鳴らしながら、病院を出て行ったそうです。

それから一週間後、白木の箱に納められた名もない猫の遺骨がカサイ先生の部屋に安置されていました。

「名ナシの猫ちゃん、君は僕の最初のお客さん。どうか、この病院をお守りください」

先生は、毎朝、合掌したそうです。そして、猫の墓を買い、そこに埋葬し、さらには、その小学生に猫の墓を車で案内したそうです。

折からのペットブームで、自分の病院が大変にはやっているのは、その猫のおかげだと、いまでも信じて疑わないカサイ先生なのです。

落語家三遊亭鳳豊さんのご好意で、月刊誌MOKU九月号から転載させて頂きました。お盆にお檀家に伺つて分かつたのですが、

「まんだら通信の裏の話がとも良くて、毎月楽しみに待っています」という方が随分おりました。

『生きる意味を深耕する月刊誌』というように、丸ごと一冊買って戴くと出版社も喜ぶし心の肥やしにうつつけなのですが(新潟の林さんは、このご縁で定期購読しています)どなたにもというわけにもゆきませんし……。

『大日本帝国』は“軍国主義”・“侵略国家”でアジアの嫌われ者と思つていましたが、明治始め来日の外国人がみんな、日本人は素晴らしい人だと、べた褒めしていたのは何故だろうと勉強し直しました。日本人が書いたものは身鼻員が入るといけないので、外国人のものを読みました。『アメリカの鏡・日本』(ヘレン・ミアーズ)もそうですが、アメリカ人の彼女は、悪いのはむしろアメリカであると書いてありますし、今読み始めた『大日本帝国の真実』は、黄文雄(こうぶんゆう)さんという台湾人です。

タイの首相になったククリット・プラモートさんの「日本のおかげで、アジア諸国はすべて独立した。日本というお母さんは難産して母体を損ねたが、産まれた子供はすくすくと育っている。今日、東南アジアの諸国民が、米国と対等に話ができるのは誰のおかげか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったからである」という話を紹介していますし、フランスのオリヴィエ・ジェルマントマさんも『日本待望論』を発表して、「日本人よ、早く目覚めて世界に役立ちなさい」と齒ざりしています。

はみだし 余滴